

ローマ進軍とその周辺 (1)

エミリオ・ルッス 著

柴野 均 訳

〈解題〉

『ローマ進軍とその周辺 *Marica su Roma e d'intorni*』は、エミリオ・ルッス¹がファシズム体制によって反ファシズム運動を理由として課せられた流刑からフランスに脱出した直後の1929年に、書かれた著作である。序文にもあるように、ルッスはこの本を外国人に向けてファシズムの実像を知らせる目的で書いた。したがって、これは政治的な意味の濃い著作である。

しかし、それと同時に、これはルッスというきわめてすぐれた作家の処女作ともいえる著作でもある。第一次大戦から復員したルッスが、戦間期の政治的激動をくぐり抜けたあとにそれを振り返った著作であり、当事者でなくては語れない内容を豊かに含んでいる。その意味でこれは歴史的な証言としても貴重な著作なのである。

とりわけサルデーニャ島という、基盤が弱い地方で誕生し発展していったファシズム運動のたどったプロセスをルッスが詳細に述べている点は、イタリアにおけるファシズムの生成過程を知るためにも重要な意味を持っている。

翻訳の底本としては *Emilio Lussu, Marcia su Roma e d'intorni*, Einaudi, 1945. を使用した。[] は訳注である。

序 文

わたしはこの本を書くことによって、わたしの国で起きた政治的な出来事の意味をたしかめようとした。そしてその政治的事件とはわたし自身がこの数年間経験してきたことでもある。

この本の中にファシズムの歴史を書いたと主張するつもりはない。わたしは自分の活動に関係したいくつかのエピソードを語っているだけである。それは総動員直前に大学での学業を終え、そして第一次世界大戦で戦い、戦後の政治闘争に参加し、そして最後に——反議会主義的な読者がたじろがないことを望むが——下院議員となった一人のイタリア人の行動の記録である。わたしは第一期ファシズムの世代と同じ世代である。ファシズムの指導者の多くはわたしの子供時代や学生時代の仲間であり、戦友でもあった。

この本がイタリアで批判を巻き起こすであろうがために、裏付けのないエピソードをひとつも入れないようにわたしは心がけた。わたしが回想している事実の内容については否定されることはありえない。ひとつの事実に対するさまざまな判断が一致しないこともありうる。明らかにサーベルで一撃を加える者は、その一撃を受ける者と同じ印象を持つことはないであろう。サーベルの一撃がいつもそれとして受け取られるとは限らない。

¹ エミリオ・ルッスに関しては拙稿「エミリオ・ルッスの軌跡」『信州大学人文科学論集30』1996年および、拙訳エミリオ・ルッス著『戦場の一年』白水社2001年訳者あとがきを参照のこと。

この本の中で描かれているファシズムは、その誕生・成長・成功をわたしが見たファシズムである。もちろん多くの側面をわたしは見逃しているであろう。たぶん特定の部分を重視しているであろう。だがそれはある立場に立つ人間の目で見るとは避けられないことである。おそらく時間が経過することによってのみ、より主観性の少ない批判が可能になるのであろう。現在ではわれわれの一人一人が自分の中に考えだけでなく、熱情をも抱いている。われわれは自らの証言と印象を提示することができる。その評価は他の人々にまかせればよい。

ファシズムに対する一人の民主的反対者の周囲で起きた出来事を知ることで、外国の読者はファシズムと反ファシズムおよびイタリアの文明そのものに対する考え、大まかなイメージを得ることができるであろう。

だが一般化は避けるべきである。ひとつの民族が一時的な対立で代弁されることもないだろうし、民族の文明が世紀の断片から演繹されることもないだろう。

E. L.

イタリアでの刊行に際しての序文

何年も経過して政治的な経験を積んだ現在、『ローマ進軍とその周辺』を読み返すと、この本には不備な点があることに気づく。わたしがこの本をフランスやイギリス、アメリカの人々を対象として書いたことは事実であるが、*そうした意図があったにしても同じように不備であるように思える。この本の中で下している判断のいくつかは今ではあまりに単純であると思えるし、当然見直さなければならない。しかしわたしはこの本を最初の版のまま自由なイタリア、あるいは自由への途上にあるイタリアの人々に委ねることにする。なぜならこれは歴史の研究書をめざしたものではないからである。これはイタリアの文明の一時期に関するたんなる主観的な記録である。そして主観的な記録は改訂や修正を施してはならないものだからである。

1944年10月31日 ローマ

*『ローマ進軍とその周辺』はフランス語版、英語版（ロンドンとニュー・ヨークで別々の版）、ドイツ語版、スペイン語版、ポルトガル語版が刊行された。イタリア語版は1933年にパリで（クリティカ出版社）刊行されたが、その序文には次のような覚書がつけられていた。

「わたしは本書をもっぱら外国向けに書き、イタリア語版を出すことは考えていなかった。友人たちの勧めがあってイタリア語版を出す気になった。こうなることを当初から考慮しておれば、この本は確実に別の形式、別の筋立てになっていただろう。本来であればそうしたかったが、書いたものをイタリア人読者向けに書き直すだけの時間がわたしにはない。そのためこの版では序文も含めて一切の変更を加えていない。」

ローマ進軍とその周辺

すべての武装せる予言者は勝利し、武装せざる予言者は敗北する。

マキアヴェリ『君主論』

まあ考えてもみてくれ。

四人の男がわたしを殴りつけていて、それを見ている二百人が『なんてことをする!』というだけで、指一本動かそうとはしないのだから。

怒り狂った四人がそんな振る舞いをして、二百人の間抜けが『ノー』というだけなら、わたしがどうなるか考えてくれ。

ジュゼッペ・ジュステイ

[19世紀トスカーナの詩人]

第一章

パリで講和会議が開催されたとき、わたしの所属する大隊はユーゴスラヴィア国境の休戦ラインに配備されていた [イタリア軍とオーストリア軍の休戦は1918年11月3日に成立し、パリ講和会議は翌1919年1月18日に始まった]。軍隊は民主的だった。自由と正義のために五年間ものあいだ戦った、とわれわれは宣言したのではなかったのか? ウィルソンのメッセージは兵士たちのあいだで非常に評判が良かったし、その十四ヶ条がヨーロッパ外交との接触の中でひとつひとつ崩れて行くように見えたときの落胆も大きかった。兵士にとって外交団はそれ自体が参謀本部とほとんど同じくらい反感をそそるものだった。

講和会議へのイタリアの代表だったオルランド [ヴィットーリオ・エマヌエーレ・オルランド (1860~1952)。1917年10月以降首相をつとめていた] とソニーノ [ジョルジョ・シドニー・ソニーノ (1847~1922)。重要な大使職を歴任して、当時は外相だった] が、ダルマツィアのイタリアへの帰属を含む、ロンドン協定 [第一次大戦への参戦にあたってイタリアが連合国側と結んだ秘密協定] の履行を主張して会議の進行を阻んだとき、わたしのいた防衛陣地では将校たちのあいだで激しい議論が起こった。わたしの旅団の司令官 (将軍であった) も外交に関心を持っていた。彼はビッソラーティ [レオニダ・ビッソラーティ (1857~1920)。改良社会主義派の指導者で参戦を支持し、志願兵として戦場に出て負傷した] の友人であり、したがってイタリアの将官としては最も民主的な人物だった。将校たちを集めて次のようなひとことを言わねばならないと彼は感じていた。「たしかにわれわれは戦争に勝利した。しかし、あの紳士たち [講和会議への代表団のこと] はわれわれを戦争に負けたような気持ちにさせる。」

平和の中にも大きな不安が存在していた。

ムッソリーニは帝国主義的立場から激烈な記事を自分の新聞に書いていた。しかし、その当時彼は兵士たちのあいだではきわめて不人気だった。1918年の末に最初の復員兵たちがカンピドーリオで開いた、イタリア復員兵士大会で彼は発言することさえできなかった。彼の新聞の資金の出所が非常に疑わしいとされていたし [ムッソリーニは参戦を主張して社会党から離れ、新聞『イル・ポーポロ・ディターリア』を創刊したが、その資金は複数の大企業家から出ていた]、戦

争を執拗に望んだくせに戦場では慎重に振る舞ったと非難されていた。兵士たちにとっては彼のよく知られた負傷も、回復すれば参戦主義者に塹壕での義務を免除するだけの理由にはならなかった [ムッソリーニは1915年8月に応召するが、1917年2月に迫撃砲で負傷し、その後除隊となった]。参戦を主張しながら実際に戦わなかった政治家たちに対してはすべての兵士たちが強い軽蔑の念を抱いていた。

動員解除は段階的に進められた。数百万の兵士たちが、戦争にはうんざりして平和を求めて、民間人としての暮らしに戻った。しかし、彼らは熱烈な平和支持者という深い感情とともに戦場の気分をも持ち込んでいった。

人間の心理は対立に満ちている。その直前の数年間に起きたことは、ロマン主義あるいは軍国主義的な興奮から戦争を望んだ人々が主張したこととはまったく正反対のことだった。参戦派の人々は戦争そのものには平時の穏やかな精神で参加するか、参加したふりをするか、あるいはまったく参加しなかった。

さらに動員解除された数千の兵士たちに対して、国はすぐに職を与えることができなかった。生活費は上昇するばかりだった。こうして失望と怒りが生まれた。ああ、そうすると兵士たちが飢え死にする一方で、軍需産業の企業家たちは数百万リラの儲けを見せびらかすことになるのか？ これが平和ということなのか？ これなら戦争の方が千倍もましだ！ たしかに暮らしはこれほど絶えず危機的なのに、得るものがこれほど少ないとは！

こうしたことすべてが不安を増大させていった。

サランドラ [アントーニオ・サランドラ (1853~1931)。自由主義派の政治家で、イタリアの参戦時に首相だった] が首相をつとめる内閣は1915年以来兵士たちを戦争に動員するために、彼らに対して土地の分配を約束していた。後継政権も同じ約束をしており、わたしたち将校も塹壕で兵士たちに対して「農民に土地を与えること」に関する省庁や最高司令部の通達を説明していた。

戦争に勝利したいま、その報償として農民たちは政府と地主に対して土地を要求した。だが、政府は今では考えを変えており、地主たちも（四年も後になってから）他人の財産を気前よくくれてやろうとした政府要人に対して精力的に抗議していた。土地が農民に与えられるのは国家の崩壊が頂点に達したとき、つまり戦争に破れたときであって勝ったときではない、というのが彼らの主張であった。そしてロシアの例を持ち出していた。戦勝国の兵士たちは外国で土地を獲得するのであって祖国で土地を横領するのではない、と地主たちは主張した。その実践的な方策として彼らは小アジア、グルジアへの遠征やダルマツィアへの越境、チュニジアの現体制の転覆などを政府に提案していた。いくつかの地方では土地を持たない復員兵士たちが最貧層の農民たちとともに耕作されていないラティフォンド [南部の大土地所有農園のこと] に侵入していた。

当時ムッソリーニは農民たちの側についていた。

農村での興奮状態も都市のそれと比較すれば問題にならないほど小さなものだった。生活費がかさむ一方だったのに対して賃金は上がらなかったし、下がる業種すらあった。戦時利得者たちは増大する貧困を前にして自分たちの富を見せびらかしていた。大商人たちにとっては戦争が終わるのは早すぎたが、彼らは度外れた利益をあげていた。多くの都市では飢餓が目の前に迫っていた。そこから商店への略奪や街頭での衝突が発生した。「民衆を飢えさ

せる者どもよ、くたばれ！ やつらの貪欲さに鉄槌を下す反乱は絶対に必要である！」とムッソリーニは自分の新聞に書いた。

組織された労働者大衆は経済的な要求の中に政治的イデオロギーを持ち込んだ。ロシアの例からは、イタリアでも革命が必然であり可能であるように思えた。組合をめぐるすべての対立はストライキに発展した。こうして部分的なストライキは数多く発生したが、多くの人々の意見によれば、これは政治的ゼネストの訓練だった。労働者大衆の多くが支持していた社会党はいくつかの潮流に分かれていた。即座に暴力的な革命を望むグループ、漸進的かつ合法的改革を望むグループ、何を望んでいるのかすらわからぬグループなどが存在した。この最後のグループが最も突出して激しい分派を形成していた。党指導部は対立する諸潮流の調停に懸命に努力したが、混乱は激しくなる一方であった。

大企業の労働者たちのあいだでは戦争に対する反感が他のどこでよりも強かった。彼らは決して戦争に積極的にかかわらず、反対し続けた。それはまるで休戦が発効しておらず、再び戦争が勃発しかねないかのようであった。現実にもそうした反感は戦争を戦った者全員がまるで四年間享樂的な放浪生活をおくったというような、軽蔑として表れた。こうした精神状態が労働者を兵士や軍隊に対する共感から遠ざけるのに大いに影響を与えた。

わたしはこうした戦争反対のデモンストレーションを目撃したことがある。それは多少混乱はあったが、堂々たるデモであった。戦争に対する遅まきながらのこれほどの怒りを表した国はイタリア以外にはない。戦後に示された戦争反対の意志の一部分でも、開戦以前に労働者大衆がイタリアにおいて見せていれば、戦争は確実に行われなかっただろう。

誰よりも強い不満を抱いていたのは除隊した予備役将校と「特別攻撃隊」たちだった。「特別攻撃隊」とは戦争末期に、もっぱら攻撃だけのために特別に編成された部隊だった。彼らには塹壕での勤務は割り当てられず、後方で何も考えずに気楽な生活をおくっていた。しかし、司令部がきわめて危険な作戦を必要とするときには、前線に送られて戦闘に投入された。動員解除された彼らは、仕事や平和という新しい環境の中で、居心地の悪さを強く感じていた。それは彼らに適した空気ではなかった。戦時には貴重な存在である彼らも、平和な時期には最悪の存在になった。戦時にあって彼らは歩兵たち、つまりつらい勤務、厳しい規律、塹壕生活などを馬鹿にした。平時にあっては民主主義、つまり多数派による政府、官僚機構、合法的な活動などを馬鹿にした。彼らに土地が与えられていたとしても、それをどうすることもできなかっただろう。彼らは定住者ではなく放浪者であり、落ち着くことなく行動を求め続けていた。

予備役将校の多くは、それほど難しくない養成コースを経たり、戦功によって階級を得ていた。戦争前には学生や下級事務職員、職人だった人々が中尉や大尉となって小隊、中隊、大隊の指揮官となっていた。

戦時に中隊を指揮していた者が、何の努力もなしに、学校の椅子に座って勉強を再開できるものだろうか？ 大隊を指揮した者が、屈辱を感じることなしに、500リラの月給で文書館の職員や書記をまたつとめられるだろうか？ 彼らにとって平時の生活は不可能なものに変わっていた。戦争の期間中に多くの人々が自分の家や職場で得ていたよりも良い環境に慣れてしまっていたために、イタリアの将校たちはドイツの将校によく似た状況下に置かれることになった。戦争に勝利した彼らが絶望的な状態で平時の生活に戻ることができるだろう

か？ 毎日自分の命を危険にさらしたのは彼らではなかったのか？ 徴兵を免れてキャリアを積んだ連中の部下として、おとなしく仕事に適応しなくてはならないのか？ いやそれは違う。戦争の方がまだましだ。こうした「特別攻撃隊員」や将校たちの存在が政治的危機をさらに先鋭なものにした。彼らは極左とナショナリズムの諸党派のあいだを揺れ動き、その後すぐにダヌンツィオとともにフィウム占領の企てに加わり、ダヌンツィオが失敗するとムッソリーニと行動をとるようになる。

1918年の住民投票はフィウムをイタリアの都市であるとした。講和会議はそうした見解をとらなかった [民族自決の原理にしたがってフィウムのイタリア系住民たちはイタリアへの帰属を宣言したが、ロンドン協定でのイタリア側の要求にもこの都市は入っておらず、講和会議はフィウムがクロアツィアに含まれるとした]。詩人にして英雄であるガブリエーレ・ダヌンツィオは豎琴と剣を手にして反乱を起こした。

ダヌンツィオは民族的で熱狂的な若者の精神に対して常に大きな影響力を行使してきた。芸術的な洗練を込めて、彼は自分の行動のすべてに美的な形式を与えた。戦争前には負債に追われていたために、そうした聖なる事業に身を捧げることができなかった。別の者が彼の立場に置かれていたならば、名誉の観点から見ても、おそらく簡単に気が狂っていたであろう。しかし、ダヌンツィオは常に自分の神経を支配することができた。恩知らずの祖国と絶縁し、フランスのアルカションに逃れてそこで王のように暮らしていた。彼は、例によって王のような派手な仕掛けとともに、1915年5月にイタリアに再び現れてイタリアの若者たちを戦争に駆り立てた。

債権者たちは再び彼に襲いかかった。しかし、民族の敵、売国奴としてすぐに袋叩きにあった。そして戦争が彼をすっかり飲み込んでしまい、彼はときおり英雄的な行動で国中の関心を集めた。

戦争が終わってみると、彼の行き場はいったいどこにあったらうか？ ダヌンツィオにとっても動員解除と平時の生活への復帰の問題が存在した。彼が豪華な宮廷を必要としたことも事態を深刻なものにした。フランスは戦後になるとそれほど彼を歓迎しなかった。アルカションでの暮らしはもう不可能だった。そしてイタリアでは債権者たちがそれまでにないほどの冷酷さで容赦なく彼を待ち構えていた。

こうした危機的状況の中でダヌンツィオは講和会議がフィウムのイタリア帰属を否定したことを知った。彼がこれ以上の憤激にとらわれたことはなかった。負債者、詩人、戦士がひとりの人間の中に融合し、彼はその企てを決心した。1919年9月12日彼は「特別攻撃隊員」の一部隊と陸軍二個大隊とともにフィウムを占領した。ひとりの負傷者もいなかった。

この種の襲撃に慣れていた講和会議に対する衝撃は小さかったが、イタリアの世論に対してはそうではなかった。1919年6月にオルランドを引き継いで首相となっていたニッティ [フランチェスコ・サヴェーリオ・ニッティ (1868~1953)。経済学者から自由主義派の政治家となる] は不意をつかれた。実際にはそれは国内政治に対する憂さ晴らしの行動であった。しかし、この事件は状況を非常に錯綜したものにする恐れがあった。というのもダヌンツィオはイタリア人民の名においてイタリアへのフィウムの併合を宣言したからであった。

その時点ではそれ以上のことができなかった政府はフィウムの封鎖を命令した。詩人は自ら指揮官と称してそこに腰を据え、一日に四回人々の前で演説した。遠征や海賊行為を組

織し、^{コルボラツィオーネ}協同体体制の基礎を築いた [『カルナロー憲章』と呼ばれる原則にしたがって、協同体を単位とする国家制度が作られた。これはのちのファシズム体制に影響を与えることになる]。バルカン諸国や日本、そしてソヴィエト・ロシアとも秘密協定を結んだ。イタリアに、ヨーロッパに、そして全世界に向けて韻文や散文で長いメッセージを送った。そしてときおりローマへの進軍を行うという脅しをかけた。正規軍の中ではこんな風にいわれていた。「フィウメはマニコーミオ精神病院だ。」ムッソリーニは自分の新聞で次のようにコメントした。「現在の時点ではフィウメがイタリアの首都である。」退役士官、「特別攻撃隊員」、ナショナリスト、学生、「義勇軍志願者」、失業者、未来派そして詩人たちは驚いてこう叫んだ。「これが政治だ！」彼ら全員がフィウメに駆けつけた。

その直後である1919年11月にニッティ首相は総選挙を公示した。ダヌンツィオは首相に対する国民の軽蔑の念を強調した。ムッソリーニは民主主義全般と特に社会主義者に敵対的な姿勢をとり、戦うフィウメを持ち上げた。そしてラディカルな革命的プログラムとともに自らを筆頭としたファシストの候補者リストを打ち出して選挙にのぞんだ。選挙は整然と行われ、ムッソリーニはわずか四千票しか獲得できなかった。有権者の支持を集めたのは社会主義者とカトリック民主派であった [1919年11月16日の選挙で、全509議席のうち社会党が156議席、カトリック民主派の人民党が100議席を獲得し、戦前までの自由主義派の圧倒的な多数支配は終わった]。国内の状況は日に日に不安定なものになっていった。失業、物価上昇、ストライキは増大するばかりだった。首相ニッティは1920年6月に辞任を余儀なくされ、ジョリッティ [ジョヴァンニ・ジョリッティ (1841~1928)。20世紀初頭の十数年間首相をつとめた自由主義派最大の指導者] がその後を継いだ。戦争に反対の立場をとった老議会人ジョリッティが政治状況を統御できる唯一の人物のように見えた。しかし、その二ヶ月後労働者と工業経営者とのあいだの対立はさらに厳しいものとなった。労働者たちは賃金が生活費に見合ったものになることを要求した。経営者側は話し合いを拒否した。金属労働者たちは組織的妨害を宣言し、経営者はロックアウトで応えた。まさに戦争であった。労働者たちは工場を占拠し、自分たちで生産を再開した。この事件はイタリアとヨーロッパに大きな衝撃を与えた。それではイタリアもまたボルシェヴィズムのとば口にあるのか？ ムッソリーニは次のように態度を表明した。「工場が労働者のものか経営者のものであるかはわたしには関心がない。」

ジョリッティはうろたえなかった。軍隊を兵舎内にとどめて待った。労働者も経営者もそうした状況から抜け出る方法がわからなくなった時点で彼は調停者として介入し、対立する両者を和解させた。労働者は生産に対する管理の権利を認められたことで満足し、経営者は工場に戻ることもできた。イタリアのボルシェヴィズムはこうして終わった。その直後にムッソリーニはこう書いた。「イタリアにボルシェヴィズムの危機がまだ存在していると主張することは、特定の利害から恐怖と真実を取り違えることを意味する。ボルシェヴィズムは終焉したのである。」

しかし、恐怖は依然として強かった。わたしの友人のある大学教授は（今ではイタリアでも有数の大学の学長をつとめている）、「ボルシェヴィキ」たちが彼の妻を連れ去るのではないかとパニックにも似た恐怖に襲われた瞬間を覚えている。それはヨーロッパの新聞がロシアでは共産主義者たちが女性を社会化の対象とした、と報道したときのことであった。大地主であるわたしの遠い親戚が抱いたパニックのことも思い出す。自分の土地を失うのではな

いかという恐怖に震え上がって、わたしに向かって次のように繰り返すしかなかった。「かわいそうなわたしの子どもたち！ いったいどうやって彼らが生きて行けばいいのか？」実際には彼は結婚したばかりでまだ子どもはいなかった。あれから十年たってわたしが聞いた話では未だに子どもは生まれていない。この二人、大学教授と地主は今では有力なファシストである。

政治的な混乱の時期にはいつも想像力が大きな役割を果たす。その頃多くの者がイタリアの「ボルシェヴィキ」たちの手中に落ちた空軍の話をしていた。わたしはたまたまその最高司令官と知り合う機会があった。彼はなぞめいた人物であった。聖ルイーダ・ゴンザーガ〔イエズス会で神学研究と信仰に生きた16世紀の聖者〕とでもいうべき人物だった。彼の話ではボルシェヴィキの空軍は飛行機駐機場から盗んだ一台の「ファルマン〔1907年創立のフランスの飛行機製造会社名で、その会社の製品〕」からなっていた。戦略上の理由から飛行機は分解され、ローマの干草置場にモーターが、リヴォルノの地下室にそれ以外の部分が保管されていた。

事態の解決に成功したことで立場を強化したジョリッティは、12月に陸軍一個軍団と海軍一個師団をフィウメに派遣した。和平協定交渉は実らなかった。ダヌンツィオはテルモピュライの戦いのレオニダス王のように死ぬことを誓った〔第二次ペルシア戦争中の紀元前480年にスパルタの王レオニダスは、テルモピュライの峠でセルクセス王の率いるペルシアの大軍を阻止しようと奮闘して戦死した〕。

「フィウメの兵士たち」は前哨地点およびほとんどすべての地域で激しい抵抗を行い、数の上で劣ってはいたが反撃に転じた。しかし、アンドレーア・ドーリア号の二発の砲弾が司令部の建物に被害を与えると、そこに立てこもっていた詩人は考えを変えて白旗を掲げた。こうしてフィウメの冒険は終わった。イタリアはユーゴスラヴィアと合意して、フィウメの町は国境のわれわれの側に含められた。

このように革命的な諸運動は大きな進展を見せなかった。共産主義者たちはごくわずかな少数派だったが、社会党から分離した。ダヌンツィオはガルドーネの隠れ家に閉じこもり、そこに壮麗な宮廷を作り上げた。だが、ムッソリーニは運命に屈しなかった。あらゆる潮流の運動離脱者たちに呼びかけ、祖国が危機にあることを宣言し、「ボルシェヴィズム」に反対して自分の兵士たちを工業家や地主に提供した。ファッショの数が増加した。彼らは無意味な口争いから労働者や農民の組織に対する武装遠征、略奪、放火などの行動に移った。最大の標的は社会党だった。自由主義派や民主主義派はむしろ満足げに傍観者にとどまった。ジョリッティ首相はファシストの企てを援助した。

社会主義者を政権に関与させようとする試みが失敗すると、ジョリッティはある策略を考え出した。ファシストの「行動隊」^{スクアードラ}を武装、刺激、保護して、社会主義者たちへの攻勢をかけさせる。そして国政選挙でファシストを自陣営に引き入れ、国家という堅固な柵の中で勝ち誇った彼らを手なづける、という策略だった。第一と第二の段階ではこれは成功した。しかし、最後の段階で失敗に終わった。ファシズムは雇い主に対して反乱を起こし、幕引きの企てから抜け出し、自分自身で国家を乗っ取ってしまった。これが要するに「ローマ進軍」にいたるまでのファシズムの歴史である。

今日栄光の絶頂にあって敵対勢力もなく武器も持たないファシズムが、ロードス島の巨像〔世界の七不思議のひとつに数えられた、紀元前三世紀の太陽神を表した青銅製の巨像〕のような空前の

壮大なモニュメントを築き上げたとすれば、彼らはピエモンテの政治家 [ジョリッティ] に大いに感謝することだろう。

ファシストたちの運動が十分に力をつけた段階で、ジョリッティは下院を解散して選挙を公示した。彼は候補者リストの中に、自由主義派と民主主義派の多数派とともに、ファシストとナショナリストを含めた。選挙は1921年5月に暴力沙汰と混乱の中で実施された。

わたしはサルデーニャで反対派のリストから立候補した。

イタリアの大半の地域と同様、サルデーニャ島にはまだファシストの組織が存在しなかった。そのため選挙は大きな対立なしに行われた。たった一件だけ事件があったことを記憶している。

カリアリ県の地区行政庁所在地だったヴィッラチドロに選挙間際になってファシスト支部が作られた。そこに加わっていたのは数人の保守主義者と民主主義派および労働者のいくつかのグループで、その大半は召集経験者だった。わたしがヴィッラチドロに行くと、敵対的なデモンストレーションで迎えられた。「出て行け！ 話してはならない！ 祖国の裏切り者たちは出て行け！」わたしは非常に驚いた。わたしの政治的支援者たちは言論の自由を守る姿勢をとったが、無駄だった。自由の擁護者がすぐに被告となった。ほとんど全員が逮捕を宣告されて監獄に入れられた。わたしはたったひとりで威嚇的な群集に取り巻かれていた。現地の警察署長は個人的な見解からわたしの逮捕を命令はしない、とわたしに説明した。

混乱の中で激高したデモ参加者のひとりが数千リラの入った財布をわたしから奪った。わたしはすぐそれに気づいて、泥棒を指し示した。しかし、熱狂した人々があいだに入ってやかましいデモンストレーションを派手に続けた。

「イタリアは誰のものか？」リーダーが尋ねる。

「われわれのものだ」群集が答える。

問題はイタリアではなくてわたしの財布だということをわからせようとしたが、駄目だった。わたしの抗議は警察署長からさえ取り合ってもらえなかった。彼はこう叫んで答えた。「それは政治的な偶発事件である。」

その場から遠ざかるわたしの耳にファシストの演説が聞こえてきた。「道徳的な価値観は……。」

デモの声が遠くぼんやりするまで小さくなった。わたしの車の運転手は視線を上げて太陽を仰ぎ、叫んだ。「すばらしい天気ですね。」

第二章

与党ブロックは選挙で勝利はしたが、かろうじて過半数を制した程度だった。ファシズムは勢力を伸ばした。ムッソリーニは自分の選挙区で17万票を獲得して当選した。彼とともに36人のファシスト議員が下院に登場した。500人の議員に対してこれは決して多い数ではなかった。だがすべての人々がことばを糧にしていたこの当時、彼らの力は行動にあった。

「われわれは議会のグループにはならない。行動と実行の部隊になるのだ」と選挙後すぐにムッソリーニは宣言した。新しい会期の開始直後にファシストたちはこのことばを証明して見せた。下院から共産党議員 ミシアーノ [フランチェスコ・ミシアーノ。トリノの鉄道労働者組合

の指導者だった彼は、召集されるが、前線への出発の前夜に逃亡しスイスに逃れた。戦後は脱走行為をめぐって裁判の被告となったが、下院議員に当選して一時的に自由を回復していた]を追放してしまったのだ。

ミシアーノは戦争からの脱走者としてイタリアではよく知られていた。何よりもその功績で彼は議員に選ばれたのだった。ファシストたちはこの事実を国家的尊厳と両立し得ないものと考えた。ファシスト議員の中には社会主義者を殺したことが理由で選ばれた者もいた。したがって、彼らにはこの種のスキャンダルは我慢できなかった。ミシアーノは下院の真ん中で襲われた。

すばやく思いがけない作戦行動の場にわたしはたまたま居合わせた。

ミシアーノ議員は議場の外の広い廊下に置かれていたソファの上でくつろいでいた。彼は二人の同僚議員と政治状況について話し合っていた。ファシスト議員たちは事前の打ち合わせ通りに小さな集団でその周辺を歩き回っていた。その場に欠けていたのはムツリーニ議員だけだった。机上の計算から惑星を発見してその追跡の仕事は天文学者に任せる数理物理学者と同様に、ムツリーニは自分の司令部からは決して動かなかった。危険が予想される企てには決して加わらなかった。彼は考えて指示するだけだった。現代の傭兵隊長は穴倉にもぐり込んで電話で話すだけでつとまるのだ。部下の戦士に残酷な襲撃を指示するだけで十分だった。

わたしの戦友だったひとりのファシスト議員が切迫した様子でわたしに近づいて尋ねた。

「きみピistolを持っているかい？」

「いいや、自殺でもする気なのか？」とわたしは聞いた。そんな質問をしたことについて彼が説明を終える前に、別のファシスト議員であるグレイがピistolを引っぱり出して叫んだ。

「われわれのために！」

それが合図だった。

ミシアーノは一瞬のうちに取り囲まれた。ファシスト議員たちは彼の胸にピistolを突きつけた。

「手をあげろ！」彼らは声を揃えて叫んだ。

わたしはあらゆる信念の道義性をつねに信じていた。そしてミシアーノ議員を脱走させた思想的な理由はわたしを戦争に加わらせた理由に劣るものではない、と確信していた。それだけではない。名誉を重んじる人間にとっては戦争での英雄的行為よりも脱走の方が勇気が必要である、とわたしには思えた。こういうわけでそのときにわたしはこんな風に考えた。「ミシアーノは降参せず、殺されてしまう。」殺人を阻止するためにわたしは飛び込んだ。

しかし、ミシアーノ議員は自分自身を救った。暴力で強制された行為を無効とする法学理論を彼も信じていた。彼は青ざめてはいたが、すばやく手をあげた。生命は救われた。自分の存在を認めさせるためには、死ぬだけではなくて生きていることも必要だった。

ファシストたちは彼にピistolを突きつけたまま体を探った。ミシアーノは回転式拳銃を所持していた。だがせっかく手に入れた拳銃も役に立たなかった。ファシストたちは拳銃を押収して彼を下院の出口の方に追いやった。

そのあいだに多くの議員と下院の衛視たちが駆けつけた。ファシストたちには犠牲者を解

放するつもりはなかった。ミシアーノ議員が通過しようとしていた狭い脇廊下の柱の陰にカラドンナ議員の姿をわたしは見た。彼はプーリアで社会党のディ・ヴァーニョ議員を暗殺したという容疑をかけられていたファシスト代議士であった。彼はこの手のことには駆け出しではなかった。青ざめてじっと待ち伏せの姿勢でピストルを手に持っていた。

「何をするつもりだ？ 何を？」とわたしは彼に尋ねた。

彼は答えなかった。疑う余地はなかった。彼は通路で共産党議員 [ミシアーノ] を待っていた。同僚に知らせるのが何とか間に合って、ミシアーノ議員は別の方向から出た。

下院に与えた衝撃は大きかった。議会の歴史の中でそれまでまったくなかった新しい事態だった。

最初に反応したのは共産党だった。そして社会党、カトリック派、民主主義派、自由主義派の順番だった。自由主義派は自分たちの順番に気づかずに公平な姿勢をとり、非常に寛容な判断を下した。

下院の中には戦争の空気が漂っていた。国王の演説 [新しい会期の冒頭で、国王が上下院議員の前で行う開会演説] に対する政府の答弁声明をめぐる討論は激烈なものになった。国内ではストライキや、ファシストと社会主義者およびカトリックとの衝突が続いていた。ムッソリーニ議員は6月21日に下院での最初の演説を行った。彼は右派の議席の一番後ろに自分の席を占めた。そこは彼以前には誰も座ろうとしなかった場所だった。それは他の議員から離れて高い場所で、まるで絶壁の上にくずくまったはげ鷹のように見えた。

「わたしの演説は〈右派〉の演説となるだろう、と諸君に宣言しておく。それは反動的な演説になるだろう。なぜならわたしは反議会主義者であり、反民主主義者であり、反社会主義者だからである。」

社会党員たちは彼が20年間にわたって社会主義者であったことを思い出させた。ムッソリーニは彼らを軽蔑の眼で見つめた。そして続けた。

「そしてわたしは反社会主義者であるから、断固として反ジョリッティ主義者なのである。」

ここで抗議を行ったのはジョリッティ議員であった。老議員は驚いてムッソリーニを見つめ、彼にこう尋ねたいように思えた。「いったい何のゲームをしているのか？」実際のところ彼らはほんの数日前には同じ候補者リストの仲間だったのである。ムッソリーニは政府の内政外交政策を批判した。

「国家はより単純な形に縮小すべきである。国家は優れた軍隊と警察、よく機能する司法機構を持ち、国民の要求にかなった外交を行うべきである。それ以外のすべては私的な活動に委ねられるべきである。」

その後のファシズム協同体国家の発想は明らかにまだ構想されていなかった。

共産党議員の集団がたびたび演説をさえぎった。

ムッソリーニは彼らの方を向いて言い放った。

「共産主義者諸君のことはよくわかっている。というもきみたちはわたしの子どものようなものだからだ。こういったわたしの支持者や敵対者たちはわたしの思想をうまく消化していない。それは小さなレベルの者には向かない思想なのだ。牡蛎のように美味ではあるが、消化しにくいのだ！ 万人向けの思想ではない！」

ムッソリーニは政府のプログラムの概略を述べた。

秩序の回復を考えていたジョリッティの押しつけがましい保護からファシストたちが逃れようとしていたのははっきりしていた。

ジョリッティは長く権力の座にとどまることができず、6月27日に右派や左派とともにファシストが反対票を投じたことで政権は崩壊した。

こうしてジョリッティの計画は完全に失敗した。彼が政権を投げ出したとき、イタリアの大半の地域では内戦が支配していた。

ボノーミ [イヴァノエ・ボノーミ (1873~1952)。改良社会主義派で参戦に賛成し、志願して従軍した] が7月4日に後継の首相となった。彼はジョリッティ内閣の陸軍大臣であったが、その在任中に陸軍司令部がファシストに武器を与える事態が生じていた。しかしながら、当時の議会の混乱した状況の中では、彼は欠くことのできない左派の人物のように見えた。事実ボノーミは社会党出身で、独立改良社会主義者のグループで活動していた。彼は首相になると、ファシストから武器を取り上げることができるという幻想を抱いた。しかし、県知事に対するたんなる通達といった措置だけで断固たる作戦行動を展開できるような時期ではなかった。ボノーミは気性からして重大な決定や強硬な措置を行える人物ではなく、国家の中での自らの権威が失われてしまう状態を阻止できなかった。

議会で他の党派がモラルと権利を訴えて論議しているあいだに、ファシストたちは毎日自分たちの支配地域を拡大していった。彼らは力を誇示するためにローマで全国大会を開いた。それは三回目の全国大会で最も重要な大会となった。11月にアウグステーオの大広間で開かれた。大会の議長をつとめたのは、フリーメースンの軍高官カペッロ將軍だった。彼はその後反ファシストになり、「ドゥーチェ」に対するザニボーニの暗殺計画 [1925年に起きた、元社会党下院議員ティート・ザニボーニによる、未遂に終わったムッソリーニ暗殺計画] の共犯者として終身刑を宣告されることになる。

それまでつねに行動を中心とする運動であったファッシが、この大会で政治党派となった。ムッソリーニは新しい綱領の原理を演説の中で明らかにしたが、その演説はダンテからアッシジの聖フランチェスコまで引き合いに出すというものであった。

わたしはこの大会をボックス席の一角の目立たない席で傍聴した。あるファシスト大学生の協力でわたしは会場に入ったのだが、彼は戦争中わたしの大隊で中尉をつとめていた。わたしが反ファシストであることを彼は承知していたが、わたしに対してそれでも好意を抱いていた。彼はポー川流域の富裕な農業家の息子だったが、そこそが社会党やカトリックの農民組織とファシズムが永続的な戦争状態にある地域だった。わたしの出身地であるサルデーニャではまだその当時ファシストの小さな核しか存在せず、政治的な重要性はまったくなかった。そういうわけでわたしがかつての戦友に多くの質問を向けたのは当然のことだった。

「われわれは64の協同組合を燃やした。社会党のすべての支部を破壊した。毎週土曜日の夜は懲罰遠征なんだ。われわれが指図するんだ」と彼は語った。

「当局はきみたちの行動を放置しているのかね？」

「当局？ われわれが当局さ。」

「どうして、きみたちが当局だって？」

「そうさ、同じことさ。当局はわれわれなのさ。彼らだってあいつらの横暴さや赤旗には

うんざりなんだから。彼らはもう何の指図もしないよ。」

「だけど前よりも当局の指示は少なくなったようだけど。」

「だってわれわれが秩序を回復したからね。」

「放火と武器による襲撃によってかね？」

「他には方法がないだろう。言葉によるプロパガンダでは何も収まらない。武器が必要だったんだ。今じゃ武器を持っているけどね。われわれは自動車も機関銃も小銃も持っているんだ。」

「誰がきみたちに与えたんだ？」

「警察から来た分もあるし、農業家連盟からの分もある。」

「そうすると、今じゃあきみたちは誰からも罰されることなしに何でも好きなことをやれるわけだ。」

「いいや、危険だってあるよ。見ろよ。」

そして彼はわたしに右手を見せた。そこにはまだ直りきっていない銃創があった。

「夜襲のあいだにあの山賊連中にやられたんだ。」

「山賊って？」

「農民たちさ。」

「だけど農民の方が襲ったのか？ 彼らが襲われたんじゃないか？」

「いいや、われわれが襲撃したんだ。何とか奴らの息の根を止めることができた。奴らのやりたい放題はもう終わった。農民ひとりが一日に40リラも稼ぐなんて考えてもみろよ。」

「それで今はどうなったんだ？」

「うん、いろんなことがずいぶん変わったよ。」

「だけど、農民はどれぐらい稼いでいるんだ？」

「14リラさ。だけどそれだって多すぎるくらいだよ。」

わたしがひどく驚いているので、彼は強い口調で言った。

「でもわかるかい？ 戦争のすぐ後で戦闘功労章をつけて歩いていたら、ぼくの方を見てみんな笑うんだ。」

「そして、そのためにきみたちは彼らの給料を14リラに下げて、八つ裂きにしたのかね？」

「おお、きみはすぐにわれわれを批判するね！ ぼくたちのところで暮らしてみればわかるよ。農民はぼくと同じような服を着てるし、牛飼いの娘だってぼくの妹よりエレガントな格好さ。」

「大げさに言うなよ。だけどとにかくそれが飢えや死に値するほど重大な挑発なのかね？」

「しかし、世界が狂おうとしていて、われわれがそれを正しいものに戻したのさ。」

わたしたちは長いあいだ一緒に過ごした。ローマの通りにはファシストの集団が数多く行き来していた。特に多かったのはトスカーナとロマーニャからのグループだった。さまざまな地方から二万人以上のファシストがローマに集まってきていた。散歩の途中でわたしはある反ファシスト系新聞を買った。ページをめくり始めると、ファシストの一団がわたしに駆け寄って叫んだ。

「そんな新聞は捨てちまえ！」

「そんな汚らしいものを読むなんて、恥ずかしくないのか！」

「裏切り者はくたばれ！」

そしてわたしの手から新聞を奪い取った。不意をつかれたわたしには反応する暇もなかった。わたしの友人がその場に割って入ってわたしの弁護をし、新聞を返してもらった。この出来事に決着がつくと、わたしは彼に尋ねた。

「こんなやり方をきみはどう思うんだ？」

彼はむっとした様子だった。そしてわたしにこう説明した。

「たしかにわれわれから見れば反ファシスト系の新聞を読むことは重大な挑発行為だ。ある農民連盟のリーダーはそれが理由で殺された。それは日曜日のことだった。そいつは挑戦の意味で社会党の新聞を手にして公の席に現れた。ファシストたちが頭に来るのはわかるだろう……。」

ファシストの行動隊の振る舞いはあちこちで事件を引き起こしていた。ムッソリーニも大会でこう述べていた。

「ローマの人々はファシストでもなければ、反ファシストでもない。うるさくされるのを嫌う人々であり、もしそうされるとあらゆる階層の人々がきわめて戦闘的になる。挑発は避けて、攻撃されたときに限って自分たちを守ることにしよう。」

結局のところ暴力の論理はそれが有利に働くかどうかにかかっている。(ムッソリーニの提言にもかかわらず) 同じように挑発行為は発生した。それに対応して反撃があり、死者や負傷者が生じた。住民全体が憤激する中でファシストたちは急いでローマを離れねばならなかった。その当時ローマのファシスト支部の加盟者は百人に満たなかった。

アウグステオの大会はイタリアのあらゆる地域での暴力の復活のきっかけとなった。両陣営の死者は相当な数にのぼった。ファシストたちは襲撃中に死亡し、その他の人々は身を守ろうとして死んだ。危機的状态を抑えられなかったボノーミ内閣は1922年2月に崩壊し、ファクタ [ルイージ・ファクタ (1861~1930)] が後を継いだ。ファクタはジョリッティへの盲目的な忠誠のみによって議会での評価を得ていた人物だった。

わたしは自分の政治活動の経験の中で、ファクタよりも楽天的な人物に会ったことがない。農民たちが白日の下で殺されていた。その犯罪の実行者とわかっているファシストたちには何の咎めもなかった。議会の委員会のひとつがファクタ首相に抗議文を提出した。わたしはその委員会に加わっていた。首相(内務大臣も兼任していた)は微笑みながら事実の説明に耳を傾けた。それはまるでわれわれが死についてではなく誕生について話しているかのようであった。そして相変わらず微笑みながらわれわれに答えた。

「わたしはすべてがこれから良くなるという信念を育んでいます。」

彼はイタリアでは「信念を育む首相」という名で歴史に残ることになった。

イタリアの議会民主制はファクタ首相の中にその真の本質を明らかにした。彼こそイタリアの議会民主制を完璧に体现する人物だった。そこからは当然の結果が生まれた。

「われわれは独裁者を求める！」ファシストたちは叫んだ。

ファシストだけではなかった。

この瞬間からムッソリーニは「ドゥーチェ」という呼び声を聞き、「ローマ進軍」を考え

始めた。

しかし、議会が信用を失っていたとしても、ファシズムは国民の大半から嫌われていた。武装遠征と殺人のテロルによってファシズムを押しつけることができた地域もあったが、国民の気持からますますファシズムは遠いものになっていた。軍隊までがファシズムに敵対的になっていた。陸軍参謀本部長で最も人気の高かったバドーリョ将軍 [ピエトロ・バドーリョ (1871~1956)。第一次大戦中に指揮官として頭角を現し、戦後は陸軍の要職を歴任した。ムッソリーニ退陣後に政権を担当することになる] は、ファシズム全体を仰天させたインタビューの中で、次のように明らかにした。

「一週間のあいだわたしに全権を与えてくれれば、ファシズムは跡形もなくなるだろう。」
ファクタ首相は「信念を育み」続けていた。
こうしてクーデタに有利な情勢が熟していった。

第三章

1921年の半ばにはサルデーニャでもファシズム組織が生まれていた。サルデーニャでのファシズムの先駆者は数少なかったし、その追随者も多くはなかった。先の選挙でわたしが有権者と財布を失った町には正規のファッションの最初のものが作られた。しかし、その数は増えなかった。わたしがその町を通ったのはその後一回だけだったが、そのときにはポケットを空にして行った。だが、そこにはもはや政治的な動揺の跡形もなかった。ただし5月の勝利の余韻は残っていた。

イグレスィアの町とその周辺はかなり重要な鉱山地帯だった。アンチモン、方鉛鉱、無煙炭などの鉱山はサルデーニャ島では唯一の大きな工業だった。したがって、企業家と労働者組織のあいだの対立は避けられないものとなっていた。労働者側の代表はアンジェロ・コルシであり、彼は下院議員でもあった。彼は改良派社会主義者だった。イギリスであればさしずめ労働党右派とでもいべき人物だった。戦争中はイグレスィアの町長として、出征兵士の貧しい家族の援助を他の都市の模範になるような形で行った。国王は1921年にイグレスィアを訪問した。コルシ議員は国王と労働者組織の会見の場を設け、国王による鉱山の視察に同伴した。この行動に対して社会党は彼を譴責し、綱紀委員会の査問にかけた。しかし、彼は大衆のあいだに大きな威信を持っており、党指導部も彼の王政支持の姿勢を大目に見ざるをえなかった。

ファシストたちは、周到な検討の後に、厳粛な集会の席で彼が「ボルシェヴィキ」であると宣言した。

鉱山地帯のファシストの数をすべて合わせても50人に満たなかった。その全員が労働者であった。鉱山経営者たちは彼らの給料を増額し、仕事を免除した。こうやって彼らは金と時間をたっぷり手にしたのだった。

ふたりの若者、オルテッリとモッチが彼らのリーダーだった。ふたりともファシストを指揮する仕事で鉱山主たちから給料をもらっていた。

オルテッリの方はわたしもよく知っていた。戦争中彼はわたしの配下の中尉だった。戦争が終わると戦時の地位にふさわしい仕事を彼は見つけられなかった。鉱山主たちは彼にそう

いう職を与えた。塹壕では物静かで慎重だった彼がファシストになると、饒舌で恐るべき人物に変わった。

もうひとりのモッチは風変わりな人物だった。彼も戦争中は将校をつとめたが、動員解除されると法務官裁判所〔下級判事である法務官 pretore が司法を司る裁判所〕の細々とした訴訟の仕事でやっと暮らしを立てる状態になってしまった。正規の職を見つけることは彼にとっては難しかった。というのも、彼はなにがしかの教育は受けてはいたが、精神病院で何年か過ごしたことがあり、そのことを誰もが知っていたからだった。

彼の説明によると、精神病院にいたのは「文学上の気晴らしと心理学的調査のため」だったそうである。

モッチは穏やかな気性の持ち主だったが、興奮すると暴力的になった。そういうときには、もし彼の妻が家にいれば、妻を棒で殴った。もし哀れな女房が不在であれば、「ボルシェヴィキ」労働者に対する懲罰遠征を組織した。ひどいけがをして担架で家に戻ったことが何度もあった。そういうときには、本当に気丈な女性だった彼の妻は、喜ぶと同時に家にいなかったことを悔やんだものだった。

モッチは詩人でもあり、あらゆる機会をとらえて政治に対する大いなる軽蔑の念を公言することを好んで行った。しかし、彼に生活の糧を与えていたのは詩よりも政治であった。彼が文学と心理学調査のコースから早く出過ぎたということで、彼を知る人々の意見は一致していた。

モッチは自分の行き過ぎに涙を流して後悔するほど根は善良な男だったが、そうした行き過ぎを抑えることができなかった。その後ファシストと反ファシストの暴力的な対立がさらに厳しいものになると、彼はわたしの首を要求した。ある晩彼はわたしに会いに来た。それは夜もずいぶん遅い時刻で、彼が襲撃団を率いているものと思った。わたしはこう考えた。奴の女房は家にいないんだろう。身を守る用意をした上でドアを開けて彼を迎えた。わたしは十分警戒しながら何の用事でわたしのところに来たかを尋ねた。ひどく口ごもりながら、邪魔したことを詫びて、ホラティウスの頌歌の翻訳に関するわたしの意見を聞くためにやって来たと言った。イタリアでは帝政期のラテン語は多くの人々の頭痛の種になっていたのだ。

このふたりのリーダーの指導下で初期のファシストたちはイグレシアスの鉱山地帯ではそれほど大きく成長しなかった。しかし、非常にわずらわしい存在ではあった。毎日毎日集会を開き、ファシストの出版物を配布し、挑発行為を行った。

彼らは長い棒で武装して労働者たちを坑道の出口で待ち受けていた。

「くたばれロシア！」

「ボルシェヴィズムに死を！」

「国王万歳！」

「戦争万歳！」

最初の衝突では不意をつかれた労働者たちが敗れた。しかし、その後形勢は逆転した。ファシストたちは武装解除され、自分たちの棒の痛みを彼ら自身で味わうことになった。次第に坑道周辺の平穏な状態は回復され、プロパガンダと実力闘争は町のコルシ議員のまわりだけに限られるようになった。この社会党議員が自宅を出ようとするとき必ずファシストのグル

ープの敵対的なデモに出くわした。こうしたファシストたちは、仕事のある日も休みの日も、いつも動員されていた。コルシ議員が外出しないときには、ファシストたちは待ちくたびれてしまって家の前でデモを行った。

「レーニンに死を！」

彼らの判断によれば、コルシ議員は共産主義革命時代の生きた化身だった。

警察が介入することもしどきあった。そうするとファシストたちは拍手喝采し、声を揃えて叫んだ。

「警察万歳！」

自分たちの職務を遂行する際に拍手されることに慣れていない、秩序の担い手たちをこれは相当にうれしがらせた。

その喜びの大きさは、法の権威の象徴である三色の飾り帯をつけたひとりの警視正がある日こうしたデモのあいだに社会党議員に対して次のような怒りの声をかけるほどだった。

「コルシ議員、国民を挑発するのはやめなさい！」

その警視正はファシストたちのアイドルになった。

こうした活動や信念の紛れもない証拠にもかかわらず、サルデーニャのファシストたちは全国のファッション組織の中では高い評価を得ていなかった。

1921年の選挙の後にムッソリーニが共和主義的な傾向の宣言を行うと、鉱山地帯のファシストたちは国王に対する献身を表明する電報を送り、一致して反対に立ち上がった。ムッソリーニは電報で返信を送り、その中でイグレスィアスのファシストたちを「道を誤った愚かな同志」ときめつけた。ムッソリーニによるこうした否定は地域全体を揺り動かし、即座に反応を呼び起こした。鉱夫たちの指導者の何人かが不意打ちを受けて重傷を負った。コルシ議員も真昼間に街頭で襲撃され、やっとのことで身を守ることができた。こうしてゲリラ戦に再び火がついた。

カリアリのファシスト支部の事情はまったく違っていた。カリアリはサルデーニャ島の首都だった。住民たちは政治闘争が暴力的形態をとるのを忌み嫌っていた。社会党員は少数だったが、よく組織されていた。1919年に商店が略奪を受けた時期、彼らは無秩序に陥るのを阻止するために監視団を作った。その後彼らは工場占拠には参加しなかった。政府に対する反対は主としてわたしが加盟していた党派 [サルデーニャ行動党] によって代表されていたが、そこでは復員兵が多数を占めていた。したがって、攻撃的な形のファシズムがこの町で発生するのは難しかった。「ボルシェヴィズム」の危険を言い立てて正当化することは全く不可能だった。ファシズムは文学とスポーツという衣装をまとって登場した。最も目立ったファシストのひとりがザパータ侯爵だった。彼はシェーテ・フェンテス [アラゴンの有力な貴族] の一族で、屋敷の紋章は彼がスペイン豪族の末裔であることを物忘れのひどい者にも思い出させた。しかし、彼はかなり以前からサルデーニャでは有力者ではなかった。先祖代々の広大な領地のわずかに残った土地から上がる地代で派手な生活を送っていた。青年時代を通じて政治にかかわったことは一度もなかった。彼はこんな風に認めていた。「わたしは祖先からたったひとつの政策^{ポリティカ}を学んだ。つまり、指揮する技術である。」戦闘の労苦には不向きだと医師たちが診断を下したため、彼は戦争には参加しなかった。しかし、彼は戦争好きで英雄や殉難者たちを賞賛した。1916年には自分の家でパーティーを開き、16世紀の彼の祖先た

ちの軍服や武器を身につけてその場に現れた。兜や鎧の重さのせいで汗だくになって苦しみながらも、会合の最後まで弱音を吐くこともなくすべての装備をまとい続けた。そのときに彼はこう叫んだ。「おお、どうしてスペインにはもうムーア人がいないんだ？ やつらをアフリカに追い返すためならわたしの財産も命も喜んで差し出すのに。」

この言葉は人々の聞きおよぶところとなり、カリアリの町ではいろいろ論議された。それはまさにオーストリア軍がわれわれの防衛線を突破し、アジアゴの高原地帯に進出した時期であった。

少々乱れた席でひとりの敵対者が面と向かって彼に叫んだ。「侯爵閣下、あなたは卑怯者だ。」

侯爵は瞬きもせずに応えた。「二四時間後にわたしの剣にかかって死にたくなければ、今の言葉が偽りであったと認めなさい。」

「卑怯者の上に滑稽でもある」と傲慢な敵対者は繰り返した。そして騎士たる者の行動を定めた最も基本的な規範を踏みにじって、侯爵のあごに拳骨を食らわせた。その結果侯爵は地面にはいつくばることを余儀なくされた。

この事件やこれに似通ったいくつかの騎士道的事件のせいで、ザパータ侯爵はカリアリでも非常によく知られるようになった。

だが、彼は何よりも詩に対する情熱で有名だった。非常にかわいがっていた幼児に最初の歯が生えたときに、彼は三二の詩章と補遺一章からなる長詩をものにした。

これほど目立つ人物をファシズムが見逃すわけがなかった。ファシスト知識人協会は拍手喝采してザパータ侯爵を会長に指名し、彼はその機会にもう一編の詩を書いた。

二番目に目立つファシストもやはり侯爵だった。彼は一八世紀の大封建領主であるマンカ・ディ・ティエーゾ家の傍系の血を引いていた。一族の紋章の中にあるむき出しの左腕は（一族内での主張によれば）、紀元前五世紀にエトルスクの王ポルセンナを震え上がらせたローマの英雄ムツィオ・シェヴォーラが祖先であることを裏づけていた。土地のファシストたちはこれとは違う解釈をすべて否定し、彼を真の古代ローマ人の血統を持つ人物と見なした。

彼は文人侯爵とは正反対の性格だった。ラテン語を学ぼうとしたのはファッションに加盟した後のことだったし、その成果も乏しかった。彼は文学を嫌っていた。戦争中はアルプス狙撃兵団の将校として高い評価を得ていた。彼は中隊に配給されたコニャックをたったひとりで数時間のうちに飲み干したことがあった。親しい相手には正規の敬礼を決してしなかった。「エヴォーエ！」と言うだけだった。それはオリュンポスの父神がセメレの息子バックスに戦闘の意欲を刺激するときに使う叫びだった。

要するに彼は——言って悪いわけがあるか？——酒を飲まない男ではなかった。彼は勇敢な兵士だった。そして戦後はやっとのことで暮らしていた。祖先からの財産としては既に述べたむき出しの左腕しか残っていなかった。しかし、一本の腕だけでは生きて行くことはできない。特にそれが古代のものであるなら。

ファシストたちはすぐに彼に立派な職を提供した。

三番目の指導者（年齢の順であって、重要度の順ではない）は若い工業家のヌルキス氏だった。彼もまた戦争に加わっていた。彼は激烈な戦闘を経験して神経を抑制する力を失って

しまった。この出来事のために、しばしば混乱に陥るようになった。しかし、彼にとって戦争でこうむった心理的な悲劇は、自分の教育の欠陥を隠すためには役立った。彼はきわめて基本的な教育しか受けていなかった。彼は演説が大好きだったが、文法や統語法の誤りを数多く犯すのは避けられなかった。彼を知らない人々はこんな風に言ったものだった。

「かわいそうに！ 戦争の犠牲者だね。」

彼は生来の革命家だった。あるときわたしが大勢の人の前でしゃべっていると、突然わたしの話をさえぎって言った。

「もう言葉はたくさんだ！ 行動に移らねばならない。革命万歳！」

「どんな革命かね？」とわたしは彼に尋ねた。

「革命とは……。われわれに革命を指示して下さい。われわれはあなたについて行きませぬ。」

彼はいかなる犠牲を払ってでも革命を望んでいた。ファシズムは彼に革命を約束し、彼はファシストになった。

わたしは彼を非常によく知っていた。わたしの政治的な敵対者になったにもかかわらず、戦争の経験のせいでわたしに対して崇拜と友情の感情を抱いていることを彼は打ち明けていた。

「ローマ進軍」の後に彼はわたしに言った。「あなたに対するわたしの忠誠の念は非常に強い。もしファシズムの「ドゥーチェ」があなたを殺すようにわたしに命じたとしたら、それに従うことを拒否できないでしょう。ファシズムは規律と秩序なのであります。しかし、そうなったらわたしの人生で最大の苦しみとなるでしょう。」

こう話すあいだも彼の目は涙に濡れていた。

ふたりの侯爵とヌルキス氏がカリアリのファシズムの代表だった。中でもヌルキス氏は気性の激しさと私心のない行動によって実質的な指導者となっていた。ファシズムを信じる者がまだ数少ないときに彼は新規加入者特有の盲目的な信頼を示していた。彼は太鼓を持った若者たちの一団を指揮して、カリアリの町をパレードして歩いた。古代ローマの兵士のような態度で、見物人の冷笑や腕白どものからかいを気にもかけず厳粛な姿勢を崩さなかった。

「ムッソリーニは誰のものか？」彼は叫ぶ。

「われわれのものだ。」太鼓手たちが答える。

「ユリウス・カエサルは誰のものか？」

「われわれのものだ。」

「帝国はだれのものか？」

「われわれのものだ。」

古代ローマ人たちが太鼓を使わなかったことを丁寧かつ豊富な例証をあげて彼に教えた人がいた。それでも彼はひとつひとつに翼を広げた帝国の鷲を描かせた上で太鼓を使い続けた。これらの指導者たちの周囲にそれより目立たない代表者や兵卒たちがいた。

サルデーニャにはこれ以外にはファッションは存在しなかった。

第四章

イタリア全体でファシズムが勢力を伸ばすにつれて、サルデーニャでもファシストが増えていった。キャリアでも50人ほどの加盟者を持つまでになった。ファッショに参加したのは高級将校の全員と戦争期間中「退役させられていた」将軍たち、大学教授がひとりと学生が数人であった。組織に必要なすべての費用をふたりの企業家がもっていた。戦争中わたしの部下の中尉だったある補充将校が退役して、わたしの党派に加盟していた。彼が理事をつとめていた協同組合で会計上の問題が突然発生し、彼は職を解かれた。彼は党を離れ、数日後にファシスト支部に加盟した。その後道で偶然会ったときに彼は自分の行為をこう説明した。生計を立てねばならず、ファシストたちが立派なポストを約束した、というのだった。そして強い国家に対する自分の共感を否定することはできない、とつけ加えた。

「リヴァイアサンですよ」と彼は言った。

新しい党派への彼の加盟は非常に祝福された。なぜなら彼は復員兵士だったからである。ファッショの中でこの資格は高く評価された。彼は落ち着かない性格の持ち主で、同志たちを刺激するのに大いに貢献した。しかし、ファシスト組織は当初の文学や気晴らしのための性質を依然として保持し続けていた。

サルデーニャのファシズムにより大きな援助を与えたのはひとりの鉱山主、コンメンダ勲章佩綬者ソルチネッリだった。彼は全島でよく知られていた。卓越した知性の持ち主で、自分が何を望んでいるかを確実に知っている人物だった。

彼はそれまで一貫して急進的傾向の民主主義者であり、政治闘争にアクティブにかかわりを持ってきた。しかし、政治の領域では事業で得たほどの大きな成功は収めなかった。県議会や下院の選挙に何度も立候補したが、わずかな票しか獲得できなかった。イタリアでファシズムが頭角を現すようになると、選挙での敗北にもかかわらず、彼は自らの民主的な考え方を守ろうとし、民主派および急進派であり続けた。しかし、息子たちをファッショに加盟させた。この事件はそれほど大きな驚きを呼び起こさなかった。というのも、戦闘的な民主主義者たち（特に国家公務員）は彼と同じような状況にあったからである。

数カ月が経過し、避けられない事態が現れた。政治においては固定した立場をとるのは難しい。ひとりの民主主義者も自分の中に無限の発展の可能性を秘めている。完璧な論理を保持しながら彼は共産主義者にもファシストにもなりうる。コンメンダ勲章授章者ソルチネッリはじっくり考えてファシストになった。彼は日刊紙をファシズムに提供した。

この新聞は既に20年以上の歴史があり、購読者も非常に多かった。一貫して民主主義的な新聞だった。株式の大半は老民主主義者たちが握っていた。だが、ソルチネッリは十分な金を支払い、株主たちも原理にもとづく非妥協的な反対の態度を不適當と考えた。すべての株を譲渡し、思想を守ったことに満足した。

新聞はサルデーニャ島のファシズム運動にそれほど大きな威信を与えなかった。新聞の変身は多くの人々から本物のスキャンダルと受け取られ、購読者はすぐに減少した。しかし、それでもファシストたちは新聞を手に入れた。

新聞の所有者となったキャリアのファシストたちは、やがてその新聞が自分たちについて

語る必要があることを感じるようになった。「気晴らし」と「文学」は記事の中では大きな関心と呼ばなかった。北部イタリア、ロマーニャ、トスカーナなどではファシストたちが武器を手にして絶えず戦闘を強いられていた。そして敵対陣営は数多くの負傷者、死者、敗北をこうむっていた。サルデーニャ島のファシストたちは自分たちの地域の平穏さを恥ずかしく感じるようになり、競争心が彼らを次第に大がかりな企てに駆り立てた。ぼんやりした民主的な用語を捨て去った彼らの新聞は次のように刺激を与えた。「ファシストたちはサルデーニャで何をしているのか？ 目覚めよ！ 武器をとれ！ 英雄的な精神を創り出さねばならない！」

カリアリのファッショは行動隊単位に組織された。ある日曜日、行動隊が隊列を組んで登場し、全員が棍棒で武装して軍事行進を行った。棍棒はイタリアでの最初の行動隊の武器だった。旋盤で削った大きな棒で、畑で使う麦打ち棒の形に似ており、国旗の三色に塗られていた。それを見た人々は口笛を吹いて迎えた。だが、それ以上重大な事件は起きなかった。

ファシストたちは街中での成功だけで満足せず、別の日曜日に近くの村モンセッラートを襲った。三隊に分かれて主要な道を練り歩き、政治的に対立する陣営を侮辱する歌をかなりたてた。戦闘的な態度や棍棒、歌などが土地の住民をいらだたせ、衝突が発生した。ファシストたちは取り囲まれて痛めつけられた。乱闘の中で叫び声やわめき声があがっているときに、たまたまわたしは自動車でモンセッラートを通りかかった。乱闘の真ん中にいたファシストのリーダーは自動車のライトの上によじ登ってベレー帽を振りながら叫んだ。「助けてくれ！ 助けてくれ！」そのまわりには怒り狂った群衆が叫んでいた。

わたしはその場に介入し、争う人々に落ち着くように働きかけた。しかし、たくさんの人がわたしを知ってはいたが、ファシストたちをそうした厄介な状況から引き離すのには相当苦勞した。調停者の仕事をしているあいだに、わたし自身がそれほど軽いとはいえ打撲傷を何ヶ所かに受けた。そして最後によりやくファシストたちを解放することに成功した。

ファシストたちは賢明に振る舞った。棍棒を放棄して戦争の捕虜のように列を作り、取り囲まれて駅にたどり着いた。途中の駅でまた衝突が起きることを心配してわたしも同じ列車に乗った。

帰途では事件は起きなかった。ヘッドライトによじ登った遠征隊長がわたしのそばにやって来た。頭はコブだらけで白いハンカチを包帯代りに巻いていた。彼はわたしの関与に厳かに感謝した。戦争は戦争であり、勝つことも負けることも同じように名誉あることだ、と彼はわたしに述べた。「肝心なのは戦うことです」と言った。そして最後に感謝の念を記念するために自分の写真を感動を込めてわたしに差し出した。わたしには遺品や思い出の品物を収集する習慣はなく、断る理由を説明するのに苦勞した。彼はそれ以上しつこく言わなかった。

その夜ザパータ侯爵は一睡もせず短い詩を一気に書き上げた。そのタイトルは『戦いと血』というものだった。

ファシスト陣営の憤慨は激しかった。彼らの新聞は裏切りに対して叫び声を上げ、わたしは賞賛を込めてマラマルド [16世紀に皇帝側について戦ったカラブリア出身の武人] に例えられた。

短期間のうちにファシストたちは動員解除を行った。棍棒で武装して現れることもなければ、黒シャツでパレードをすることもなく、侮辱的な歌を歌うこともやめてしまった。市民

生活は以前の静けさを取り戻した。しかし、火種は灰の中に残っていた。

ファシストの全国幹部たちはあらゆる場所に真の戦闘組織を作らなければならないことを要求していた。「活動を劇的なものにする必要がある」とムッソリーニは彼の新聞に書いた。ファシスト党中央部はサルデーニャを見逃すわけにはいかず、この課題に特別な能力を持つ人物を送り込んだ。それがロブランド氏だった。

あらゆる信任状を携えて彼はキャリアリにやって来た。大きな権威を持つ人物として、彼のために盛大な歓迎の宴会が開かれた。ロブランドと呼ばれていたが、間もなくこれが偽名であることがわかった。彼はヴェローナのファッショに属する行動隊の隊長だったが、ふたりの社会党員の労働者を殺したために司法当局の追求を受けていた。そのため名前を変えなくてはならなかった。彼の本名をわたしはもう思い出せない。ファシストのキウルコ教授が書いた『ファシスト革命の歴史』の中では「中央委員会代表ジュリオ・ロブランド」という名前で呼ばれている。おそらく第二の名前をそのまま使うことにしたのだろう。

彼は並外れた人物であった。その並外れた資質は彼が一貫してその中で戦ったヴェローナのファッショにも見られる。このファッショのたどった経緯はイタリア中に知れ渡っていた。ある有名な裁判がファッショの起源と事歴を明らかにした。それはイタリアでも有数の攻撃的なファッショで、何件かの殺人を誇りにしていた。あるエレガントな「喫茶店」の常連たちがこのファッショを作った。この店に当初は本部が置かれていた。店の女主人はファシストのリーダーの友人だった。彼女は自らの手で刺繍した旗をファシスト支部に寄贈した。その町の大きな店のウィンドウの中にその旗が長期間展示されていた。「ヴェローナの貴婦人からの寄贈物」と説明がかかっていた。

ロブランド氏はキャリアリでの再組織化の仕事にとりかかった。警察は彼にはまったくかまわなくなっていた。組織化はすぐに成果をあげた。前歴にあまりこだわることなく、新しいメンバーが短期間で集められた。傷害と窃盗で有罪判決を受けた者ふたり、ある「喫茶店」の所有者である評判の悪い「ボクサー」ひとり、怠け者と浮浪者数人が新しい組織の幹部となった。いかなる犠牲を払っても行動に移らなければならない。目的は手段を正当化するのではなかったか？

最も重要な役割を果たしたのは行動隊用の制服が作られたことだった。

彼らは毎日野原で軍事演習にはげみ、夜になると棒で武装して集団で外出した。

彼らが進歩ぶりを初めて発揮した現場にわたしは居合わせた。共産党員として知られていた16歳の労働者がひとり散歩していた。隊列を組んだ60人ほどのファシストたちが彼の後を追っていたが、彼は気がついていなかった。まさしく真の軍事的戦略をもってファシストたちは彼をあらゆる方向から取り囲んだ。突然リーダーが叫んだ。「われわれのために！」全員が同時に若者に向かって突進した。襲われて地面に倒された若者は、棒で殴られ足で蹴られた。作戦はほんの一瞬のことだった。行動隊は再び隊列を組み、ファシストの歌を歌いながら早足でその場から離れていった。血まみれになった若い労働者は担架で病院に運ばれた。

千人ほどの市民がその光景を目撃した。襲撃者の多くは知った顔だった。警察はその時点でも後になっても介入しなかった。逮捕者はひとりもいなかった。

その翌日キャリアリの町は反応を示した。ファシズムに反対する諸政党の若い党員たちが統

一戦線を結成した。襲撃を受けたのが共産党員であるか自由主義者であるかは重要ではなかった。数時間のうちに行動組織とそのリーダーが急ごしらえで作られ、こちらも棒で武装した。夜になると衝突が発生した。街路やファシストたちのたまり場でファシスト行動隊員たちを探し、襲いかかった。警察官があちこちに配置されてはいたが、市内のあらゆる地区で争乱が起きた。ピストルを持って発砲したファシストもいたが、それによる負傷者は出なかった。住民は家に引きこもり、街路で争う両陣営の叫び声を夜遅くまで聞いていた。警察が介入するのは反ファシズム陣営側の人間を逮捕する場合だけだった。

しかし、ファシストたちは統制がとれていて、屈伏しようとはしなかった。対立はそれから数週間続いた。昼間のあいだは町は静かだったが、夜になると途端に衝突が始まるのだった。両方の側に負傷者が出た。そしてようやくファシストたちが退却した。彼らの行動隊は解散し、ファッショ指導部は公的なデモンストレーションを断念した。

警察は反ファシスト陣営の逮捕をなおも続けた。市民は逮捕者たちとの連帯を深め、警察の権力濫用に反対するデモが行われた。

県知事は明らかにファシストたちに肩入れした。それはローマからの指示だったのだろうか？ 彼自身の意志だったのか？ 市民は彼を無視した。県知事が劇場に現れると、観客たちが立ち上がって「県知事よ出て行け！」と叫ぶことが二度続いた。彼の威信は最低のものになった。立場も難しいものになった。

どうしようもなくなった政府が介入し、県知事を更迭した。キャリアに新しい県知事が派遣された。新知事は自由主義者という評判の人物だった。就任直後に棒の使用を禁じる命令を出し、警察を再編成した。彼は役人たちを前にした演説でこう述べた。「わたしは法を守るためにここに派遣された。イタリアでは山賊行為が政治の形態をとっている。しかし、わたしはここで山賊行為の鎮圧してみせる。」

知事はすぐに人気を集め、ファッショは危機に陥った。ザパータ侯爵はこんな風に始まる悲歌^{エレジア}を作った。「涙を流すわが蝶々よ……」

サルデーニャには他にもファシストの支部が作られていた。1922年10月に全島のファシストたちはイグレシアスで大会を開いた。サルデーニャの350以上の地方自治体のうちで、22の支部の代表がそこに参加した。中央指導部の代表としてファシスト議員のドゥダンが大会に派遣された。ダルマツィア生まれのドゥダンは、ダルマツィアに対するイタリアの権利を強く支持していた。彼の参加は大会の権威を大いに高めた。ドゥダンはファシズムについて、民主主義について、ボルシェヴィズムについて語ったが、何よりも力を入れたのがダルマツィアの人々についてであった。そしてフランス人やユーゴスラヴィア人を民主主義者やボルシェヴィキよりも憎むべき存在として浮かび上がらせた [第一次大戦後フランスはユーゴスラヴィア寄りの姿勢をとり、イタリアの要求を斥けた]。大会はファシズムに対するすべての敵対者を忘れてしまったように見え、もっぱら「鎖につながれた」ダルマツィアを抑圧する者たちに対する怒りを表すことに集中することになった。開会の会議は戦争のような雰囲気で行われた。

「ダルマツィア万歳！ 戦争万歳！ ユーゴスラヴィアくたばれ！ フランスくたばれ！」

何らかのはけ口が必要だった。イグレシアスの町にはユーゴスラヴィア人もフランス人も

もいなかったのに、ファシストたちは社会党の労働者たちを攻撃した。それに対する激しい反撃が起こり、大会はその日まる一日中断された。そしてより冷静になって再開された。

大会には労働組合幹部としてモッチ氏が参加していた。サルデーニャにはファシスト労働組合は存在しなかったが、彼はかまわずそれを代表していた。彼は適切なラテン語を引用しながら演説を行ったが、その中では黒シャツを着て剣を手にしたユリウス・カエサルやロムルス、レムス、ムッソリーニが登場した。

ザパータ侯爵も参加者の中にいた。彼もまた散文と韻文のいりまじった演説の原稿を準備していたが、予期せぬ事件のためにそれを読み上げることはできなかった。大会終了後カリアリに戻ってから彼はただちに町のファシストたちを集め、演説を読み上げた。演説は素晴らしい成功を収めた。

ファシストの新聞は長いあいだこの大会について語った。サルデーニャ島のファシストたちは元気を取り戻したように見えた。